

=== コスプレ継母(ママ)・初夜【レオタード編】 ===

【プロローグ】

「私は今年で四十歳になる人妻、子供は二人。大学生の長女と、三つ年下の弟がいます。家族構成としてはありふれたもの。典型的な四人家族と言えますが、しかし、実際には少々複雑な家庭でして」

「実のところ、私と夫はお互いに再婚の身。娘の香奈恵は私の、息子の信吾は夫の連れ子なんです」

「つまり、信吾にとって私は義理の母親」

「だからと言って家庭が荒れていたわけではありません。確かに多少の波風は立ちましたし、普通の家庭では起こりえないトラブルに悩まされたこともありましたが、それでも、ひとつ屋根のもと、意外なほど円満に新しい家族の暮らしは過ぎてゆきました」

「どうやら馬が合ったのか、不思議と姉弟仲が良かったことも、家族をひとつにする大きな力になってくれたのです。義父に反発する娘をなだめる役目は信吾が、義母に反抗する息子をなだめる役目は娘が、それとなく担ってくれていましたから」

「その後、しばし平穏な時が流れて」

「つい半年前から仕事の都合で夫が単身赴任。大学に進学した娘もひとり暮らしをしていたため、信吾と二人きりの暮らしになり……そんな中、事件は起こりました」

「あろうことか義母の使用済み下着をおかずにして、信吾がマスターベーションしていた、その現場を目撃したことで」

「とはいえ、さほどの驚きはありませんでした。信吾の悪戯にはずいぶん前から気づいていましたから。こっそり洗濯物を持ち出し、使用済みのパンティやブラジャーをおかずにして淫らなひとり遊ぶにふけている、そのことには」

「女性のあらゆることに興味津々な、いまだ思春期を脱しきれていない少年にはありがちなこと。単なる異性への好奇心に過ぎないと、それまでは見て見ぬふりをしていたのですが……私が考えていた以上に、信吾の想いは真剣だったようです」

「ある日、実の娘から聞かされました。信吾は義理の母をひとりの異性として意識し、禁断の想いに心悩ませているのだと、そのことを」

「どうやら信吾は、義理の姉だけには素直に打ち明けていたらしいのです……いいえ、もしかしたら相談したのかもしれませんが。義母への想いをどうすればいいのか、と」

「しかし、それを知ったところで私に何ができるわけありません。あくまで私は母親として息子愛する、それ以外にできることも、するつもりもなかったのですが……そんな中でした。夫の浮気を知ってしまったのは」

「愛する夫の裏切りに胸を痛め、いつしか離婚という二文字が頭をよぎりはじめると同時に、義理の息子への想いにも変化が生まれました」

「もし離婚をすれば信吾とも離ればなれになってしまう、そんな寂しさに心を苛まれるようになり、母性とは異質の感情を……女としての愛欲を芽生えさせるようになったのです」

「あの日、義母の洗濯物で信吾がマスターベーションをしている、その現場に出くわしたのはあくまで偶然でした。それまでなら見なかったふりをして、そっとしておいたはずですが」

「私は激高を演じ、信吾を厳しく叱りました。もちろん本気ではなく、反省を促そうとしたわけでもありません。叱りつけたあとで過ちを赦し、どうしてこのような真似をしたのか優しく問うてあげれば、もしかしたら私への想いを素直に告白してくれるのではないかと、そう思って」

「決して叶うわけがないと諦めていた義母への想い、そのすべてが受け止められたなら、信吾は今まで募りに募らせてきた欲望のすべてをぶつけてくるに決まっていると、そこまで計算して」

「結局のところ、下着の悪戯を黙認していたのは、義理の息子との過ちを心のどこかで期待していた、そんな自分がいたからなのかもしれません」

「そして……」

「私はいけない母親になってしまいました……あの日、あのときの出来事で」

【第1章】

「信吾っ、あなた何をしてるのっ！　いったいこれはどういうことっ!？」

「私の下着に何をしたのっ、んっ!?　黙っていたんじゃ分からないでしょっ！　何とか言いなさいっ！」

「ごめんなさい!?　ごめんなさいじゃありませんっ！　女性の下着はマスターベーションの道具じゃないのよっ！　しかも母親の下着に……汚れ物にっ……いやらしい子っ！　恥を知りなさいっ！　このことはお父さんにも言いますからね、いいっ!?　厳しく叱ってもらいますからねっ、分かった!？」

「な、泣いたってダメよ、お母さんは許しません」

（そうよ、まだ許してはダメ、もう少し厳しく叱っておかないと……本気で怒っているんだって、しっかり分からせないといけない。甘い顔をするのはまだ早すぎるわ）

「だって何!?　んっ!?　言いたいことがあるならハッキリ……だ、だから、いくら泣いたって、お母さんは許しま、せ……ちょ、ちょっと、そんなに大声で泣くんじゃありません、もう小さな子供じゃないんだから……と、とにかく、お母さんは……」

（もう、参ったわねえ、こんなに大声で泣かれたらまともに話もできやしない。それにしても、信吾がここまで感情を剥き出しにしたことなんて今まであったかしら？　私に怒られたことが相当ショックなのね。やっぱり、私のことが好きだったから？　そうよ、下着のオナニーが見つかったことより、想いを寄せている女性に嫌われてしまった、そのことが何よりショックなんだわ）

（もしここで赦してあげたら……もしも、どうして下着に悪戯したのかを優しく聞いてあげたら、信吾もきっと私への想いを素直に打ち明けてくれるはず。そして、その想いがもし、私に受け止められたなら……信吾は必ず、その先を求めてくるわ、絶対に……今まで妄想していたエッチなことも、何もかも）

「……ふう……もう、しょうがないわね……分かったわ。分かったから、ね？　お願いだから泣かないで」

「ええと……だったら、そうね。今ここで、こういうことは二度としないって約束してくれたら、今日のことは……今回だけは、特別に赦してあげるから」

「さあ、泣かない、ね？　泣かない泣かない……信吾はもう分かってくれたわよね？　しっかり反省してくれた、そうでしょう？　だから、こんなこと二度としないって、お母さんと約束できるわね？」

「うん、分かった。本当に約束よ？　さあ、最後にもう一度、お母さんの目を見て、ちゃんと謝ってちょうだい」

「はい、よしっ、じゃあ赦してあげる」

「いいのよ、もう言い訳なんかしなくても……つい魔が差したのよね？ 女性の下着に興味があることも分かるわ。信吾くらいの年頃の男の子なら当然のこと。でもね、いけないことなのよ」

「しかも、よりもよってお母さんのなんて、おかしいわ……まあ、べつに誰のでも良かったんでしょけど、お母さんの下着なんて全然お洒落じゃないし、それに、おばさん臭いし……ヒップアップのパンツとか、ガードルとか、そういう下着が多いから」

「うん、なあに？ 関係ないって？ デザインはどうでもいいの？ だって男の子はちっちゃいパンティとか……ほら、Tバック？ とか……そういう色っぽい下着が好きなんじゃない？」

「あら、何でもいいの？ お母さんのだから……だから、何？ 言ってることがよく分からないけど」

「誰のでも良かったわけじゃなくて、お母さんの下着だから興味があったの？ それはさっきも聞いたわよ……お母さんは、どうしてお母さんの下着に興味があるのか、それを聞いているのよ」

「フフフ、どうしたの？ 急に黙り込んじゃって……いいから、言ってごらんなさい。大丈夫よ、もう怒ったりしないから」

「うん？ お母さんが……好き？ お母さんのことが大好きなの？ あらあら……フフフ、ありがとう。こんな風にあらたまって言われると、ちょっと恥ずかしいけど、うん、とっても嬉しいわ……だから、お母さんの下着にも興味があったのね？」

「ううん、もう謝らなくてもいいの。それより、お母さんの方こそ信吾に謝らないと。さっきはごめんなさいね、大きな声を出してしまって」

「お母さんは悪くない？ フフフ、そうねえ、信吾がいけないこととしていたんですものね」

「ううん、そんなことない。大丈夫よ。嫌いになんかなっていないから。ただ驚いただけ。信吾がいい子なのはお母さんがよく知ってるもの。それに、年頃の男の子には、何ていうか……そうね、マスターベーションも必要だと思うわ」

「でもね、ほどほどにしてちょうだい。信吾にこんなことされるなんて……汚れた下着に悪戯されるなんて、お母さんも恥ずかしいから。第一、不衛生よ」

「え？ お母さんのことが本気で好きだから、我慢できない？ こらこら、本気ってどういうこと。私は信吾のお母さんなのよ……でも？ 好きなの？ お母さんを、ひとりの異性として？ あ、あのねえ、信吾、あまりそういうことは……」

「え？ だから、何？ だから、いけないことを考えちゃうの？ どうしても、お母さんでエッチな想像をしちゃうって？ んもうっ、信吾ったら、もうやめてちょうだい。そういうことを言ってお母さんを困らせないでっ、いけない子ね」

（フッフ、それにしても、ずいぶん素直になってきたわね……まあ、ある意味ではシナリオ通りの展開だけど。あの引っ込み思案で内気な信吾が、ここまで正直に気持ちを伝えてくれるなんて予想外……そうか、きっと感じているのね、男の直感で……今なら想いを受け止めてくれる、もしかしたらエッチなことをさせてくれるかもしれないって期待もあるんだわ。ええ、間違いない。あの目を見れば分かるわ）

「うん？ しょうがない？ お母さんが、美人過ぎる？ あらあら、今度はお世辞？ ふうん、お友達もお母さんのことを褒めてくれてるんだ？ まあ、ねえ、そりゃあ嬉しいけど」

「……で、何て言ってたの？ 勿体ぶらないで教えて……お友達は、お母さんのことをどんな風に褒めてくれていたの？」

「え？ 体が、いい？ 体が凄くエッチですってえ!? や、やだっ、もうっ、友達までそういう目でお母さんを見ていたなんて、まったく呆れたわね」

「べつに怒ってはいないけど……うん？ プロポーションが抜群だからエッチに見えちゃう？ えーっ!? グラビアアイドルみたいですってえ？ あははは、さすがにそれは言いすぎよ」

「……に、しても、こんなにお母さんを褒めてくれるなんて、信吾、何か企んでいるんじゃない？ 魂胆がありそうねえ」

「うん？ お母さんにお願いが？ ふふうん、やーっぱりそういうことか。いいわよ、言ってごらんなさい。何か欲しいものがあるの？ それともお小遣いかしら？」

「べつに欲しいものはない、けど……けど、何？ お母さんに着てもらいたいものがあるの？ ああ、なるほど。それでプロポーションが抜群だとか、モデルみたいだとか、お世辞を言いまくったわけね」

「何だか信吾に乘せられたみたいでシャクだけど……いいわ。いったい、お母さんに何を着てもらいたいの？」

「……あら、それって、香奈恵の……お姉ちゃんのレオタードじゃない？ 確か学園時代に部活で使っていたものよね？」

「いくら使っていないからってダメよ、勝手に持ち出したら。こっちに帰ってきたとき、お姉ちゃんに怒られるわよ……え？ 好きにしていって言われてる？ お姉ちゃんから？ 本当に？」

（いったい、どういうことかしら？ どうして香奈恵が、自分の服を弟に？ しかも、レオタードなんて……まさか二人、変なことしていたわけじゃないわよね。姉弟とはいえ、血は繋がっていないわけだし……まあ、だとしても、私が言えたことじゃないけど）

「……あ？ う、ううん、何でもないわ……まあ、そうね、お姉ちゃんがいいって言ったなら……でも、どうしてそんなものを……あっ、ちょ、ちょっと待って、まさかそれを、そのレオタードをお母さんに着させるつもり!?」

（この子ったら、いきなり大胆になってきたわね。まさかレオタードを着せたがるなんて思ってもみなかったわ）

「いくら似合うって言われても、さすがにこの歳でレオタードなんて……どちらにしたって、お母さんには着られないわよ。香奈恵のものじゃサイズが小さすぎるもの」

「う、うん、まあねえ……素材は、とっても伸びるけど、でも」

「ふう……はいはい、分かった分かった。それじゃあ試してみるだけよ、いい？ 着られなかったら無理は言わないでちょうだい」

「大丈夫よ、誤魔化したりしないから。とりあえず袖を通してみて、着られるようだったら着てあげる。ただし、言わなくても分かっているとは思うけど、このこと、お父さんには内緒よ、絶対に、分かった？」

「そうよ、お母さんと信吾、二人だけのひ、み、つ……はいはい、そんなにせっつかないで、今すぐ着てみるから。ちょっと待ってて」

【第2章】

（ふう、何だか凄いわねえ。やりたい盛りの男の子って、熱意というか、情熱というか……性に対する好奇心も執念も異常なほど強くて、こっちまで変な気分になってきちゃうわ。私はべつに押しに弱いタイプじゃないけど、あんなに熱心に迫られたら……ほだされるって、こういう感じなのかしら？ 信吾の熱気が伝わってきて、何だか私まで体が火照ってきて……疼いてるわ、私、発情してるみたい）

（それに、あの子、あそこが大きくなってたわね。Ｔシャツの裾で誤魔化していたけど、あの膨らみは絶対……オチンチンをガッチガチに勃起させて……フフフ、これで、香奈恵のレオタードなんか着て見せたら、その刺激だけで射精しちゃうかも）

（それと、お父さんには内緒よって言ったときの、あの嬉しそうな顔……ギラギラ瞳を輝かせて、すごいやらしい顔をしてた……二人だけの秘密……あの台詞できっと、ますます期待したはずよね。今からお父さんに知られてはいけないことをするんだって。もしかしたら妄想していたような、エッチな出来事が起きるかもしれないって）

「さてと、レオタードを……やっぱり、下着の上から着るわけにもいかないわよね？ とりあえず全部脱がないと」

「ええと、こっちが前、よね？ よいしょっ、と……やっぱり、きついけど、これならなんとか……ウエストまでは、いけそうね……で、ここから袖を通して……しょっ、と……肩まで、あげて……んっ……と」

「なるほど。あの子が言っていた通り、このレオタードの生地ってとっても伸びるわね。さっき見た感じでは絶対に着られないと思ったけど、さすがスポーツ用……意外に着られちゃったわ」

「うーん……とは、言っても、これはちょっと……着られることは着られたけど、やっぱり小さすぎよね。きつつきつで、生地もパツパツに伸びきって、さすがに見苦しいわ。胸もきつすぎて、おっぱいが平たく潰れてるし、それに……ビキニラインも、かなりやばい感じよね。これって競技用のレオタードなのに、生地が引っ張られてるから超ハイレグに……後ろもお尻に食い込んで、何だか股縄を締められてるみたいだわ」

「最近ほとんど処理してなかったから、ヘアも盛大にはみ出しちゃってみっともないけど、でも……あの子にとっては期待通りかもしれないわね。だって、こういうエッチな姿が見たくて、サイズが小さすぎるのも承知して、私に香奈恵のレオタードを着させたんだから」

（それを分かっている、私は……そもそも、こんなにいやらしい姿を信吾に見せるってことは、つまり、エッチなことをさせてあげるって、私から誘っているようなものじゃない？ だって、その気がなかったらこんな格好はしないし……そうよ、小さすぎて着られなかったとか、いくらだって嘘をつくこともできるんだから……本当に、いいのかしら。私、このままじゃ……）

「ううん、躊躇ってはいはダメ！ 今こそよっ、今しかないの。だって、せっかく信吾が素直になってくれたんですもの。私だって今日はそのつもりだった。だからマスターベーションの現場を押さえたんじゃない。下着の悪戯を叱りつけて私への想いを自白させたんですもの。今さらやめるなんて卑怯なことはいわ」

「じゃあ、戻るわよ、信吾のところに……キツキツの、いやらしいレオタード姿を信吾に見せつけて、そして……」

「あ、あのね、信吾……やっぱりこのレオタード、お母さんにはちょっと小さすぎたみたい……ううん、一応、着ることはできたけど……ええと……どう、かな？」

「フフフ、やだもうっ、そんなにはしゃいじゃって。レオタードがそんなに好きだったの？ でも、こんなのでよかった？ きつすぎて見苦しくない？ ほんとに大丈夫？」

（もう、この子ったら、中年男みたいにいやらしい目で……まるで、ねっとりと全身をなめ回すように……胸もお尻も、アソコも、無遠慮にガン見してっ……あああ、熱いわ、熱いっ！ 本当に視線が突き刺さってくるみたい）

「はあ、はあ……ああん、もう、そ、そんなに……そんなにじろじろ見られたら恥ずかしいわ……ちょ、ちょっと信吾っ、さっきから、そこばかり……んんう……お股ばかり見てえ、本当にいやらしい子ねえ」

「いくら興味あるって言っても、そこは……とっても、デリケートな部分だから……んんう、もう、しょうのない子」

（ああん、この子ったらますます大胆に……私の前にしゃがみ込んで、顔を下腹部に近づけてくる……いったい何をするつもり？ あっ!? ああっ!? 匂いだわっ、匂いなよね!? 本物の、アソコの匂いが嗅ぎたがってるのね!?)

（そうよね、当然かもしれない。もう下着の匂いばかりじゃ物足りなくなっていて……いいわよ、だったら、ほーら、少おし股を開いてあげるから……それで、こうやって腰を押し出して、オマンコを……恥丘の膨らみを、信吾のお鼻にこすりつけてあげるから）

「あーら、何なの、信吾……そんなにお鼻をクンクンさせて……匂いを嗅いでるの？ フフフ、好きなんだ、匂いが……アソコの匂いね？ ん？ アソコの、エッチな匂いで……オマンコの匂いで興奮しちゃうんだ？」

（うわあっ、凄いわっ、凄いわっ！ オマンコって言うだけで、オチンチンをビクビクさせて……ああん、やだ、この子ったら自分から鼻を押しつけてきて……あっあっあっ、割れ目に、鼻の先がっ、埋まるっ、グイグイ埋まってくるっ！）

「ちょっ、ちょっと、もう、そんなに鼻を押しつけて……んふふ、呆れた。本当に好きなのねえ？ 洗っていないのに臭くはないの？」

「ふうん、いいんだ？ そうね、臭いわけないわよねえ……だって、信吾はしていたんだから。お母さんの汚れたショーツで、いつもいつも、ひとりでいけないことを」

「そうなんでしょう？ さっきみたいに、ショーツの股のところを捲りかえして、沁みの匂いを……お母さんの、オマンコの匂いを嗅いでマスターベーションしていたんですものねえ」

「どうしたの？ ん？ もう我慢できないって、何が？ もしかしてえ、エッチな気分になってきちゃった？」

「だから、なあに？ お母さんと、もっともっとエッチなことがしてみたいんだ？」

「フッフ、分かったわ。ただし、今日のことは誰にも内緒よ、いい？ 絶対に言ってはダメですからね」

「それじゃあ、約束……」

「フッフ、お母さんとキス、しちゃったねえ……もしかして、初めてだった？」

「今度はもっと、本当のキスを……大人のキスを、教えてあげるから……さあ、少おしだけ口を緩めてごらん……そう……で、軽く舌を伸ばしてみて……ええ、いいわよ……ほおら、これが大人のキス」

【第3章】

「……ふう……はあ、はあ……どうだった、ん？ ディープキス、良かった？」

「あらあら、オチンチンをこんなに大きくしちゃって。ディープキスで興奮しちゃったのね？」

「うん、そうね、このままじゃ辛いよねえ？ 分かってる、大丈夫よ。お母さんが今すぐ楽にしてあげるから……さあ、これで……この、昨日穿いていたショーツで、お母さんが慰めてあげるわね」

「ほおら、ここを見て。股のところを……ここはね、クロッチって言うのよ。女性用のショーツだけの特徴かしら。男性用とは違って裏地がついているの。どうして分かる？」

「分からない？ 本当に？ いいわ、だったら教えてあげる。女性のデリケートな部分は汚れやすいからよ。だから二重になってるの。表側まで沁み出てこないように……さあ、裏側はどうなっているかしら？ フフフ、興味あるもんねえ？ いいわよ、お母さんが捲り返して、裏地の沁みを見せてあげるわね」

「あああん、やっぱりだわ。このショーツにもいっぱい沁みがついていて、今日のは特に汚れてるみたい。でも、これがいいのよね？ 信吾はこの沁みに……オマンコの沁みに、興味があったんだから、そうでしょう？」

「いつもいつもこの沁みを見ながら、お母さんのオマンコはどんな形をしてるのかなって、想像していたのよねえ？」

「ほおら、よく沁みを見てえ。今からお母さんが教えてあげるから。この、真ん中についている筋状の沁みが、オマンコの割れ目……この、割れ目の左右にできてる、キスマークを縦にしたような跡が、ビラビラの沁み……ええ、小陰唇。ラビアよ……で、このあたりが膣の入り口、膣口ね、分かる？ クリトリスは、この辺かしら？ 割れ目の先のほう、ビラビラの合わせ目にクリトリスがあるのよ」

「どう？ オマンコの形が想像できた？ フフフ、ますますオチンチンが大きくなっちゃったみたいねえ？ いいわよ、してあげるから。まずは、このショーツをお顔に被せてあげましょうか？ 黄色くなったオマンコの沁みを、こうやって、お鼻に押しつけて……」

「んふふ、どーお？ 信吾はお母さんに、こんなことをしてもらいたかったんでしょう？ お母さんに、こうやって、ショーツの匂いを嗅がせてもらって幸せ？」

「フフフ、幸せなんだ？ そんなに嬉しい？ そうよねえ、いつもいつも妄想していたことが現実になったんだから。さあ、もっと匂いを嗅いで、お母さんのエッチな匂いを思う存分嗅いでごらんなさい」

「ほーら、鼻から大きく息を吸って。お母さんと呼吸を合わせながら……はあああ、ふうふう」

「どーお？ このショーツは蒸れやすいから、いつもより匂いがきついんじゃない？ でも、なあに？ でも、それがいいんだ？ 信吾は臭いほうがいいんだ？ あらあら、お母さんの匂いだったらいくら臭くてもいいって？ 臭いなんて思わないんだ？」

「フフフ、そうみたいねえ、ますますオチンチンが大きくなってきて、さっきからピクピク動いているわよ……興奮してるのね？ 信吾は、お母さんの汚れたオマンコの匂いで興奮しちゃう変態くんなのね？」

「いいのよ、もっと嗅いで、もっともっと吸い込んで……クンクンお鼻をならして、子豚ちゃんみたいに可愛らしくっ！ あああん、そうよ、そうっ！ もっともっとお母さんの匂いで、沁みパンのオマンコ臭で、トリップしてごらんなさいっ！」

「フフフ、どうしたの？ お口を開けちゃって……あら、そうなの？ んもう、本当に変態さんなんだから。もしかして、いつもしてたの？ ん？ 信吾はいつもショーツの沁みを……お母さんのきったないパンティの沁みを舐めながら、オチンチンをしごいていたのね？」

「もちろん、いいわよ。舐めたいなら舐めても……クロッチの沁みを舐めて、味を確かめてごらんなさい。ほおら、もっと押しつけてあげるからっ、蒸れたオマンコの味を、沁みをいっぱい作っちゃうオマンコの味を感じて、もっともっとオチンチンを硬くしてごらんなさいっ！」

「本当に、いけないオチンポ、んふふふ、お母さんのオマンコ臭で、汚いオマンコの味でこんなに大きくしちゃう、エッチで変態なオチンポ、オチンポ、オチンポ」

「あらあら、体が震えてきたわよ。腰も浮いて来ちゃって、どうしたの？ もう我慢できない？ お母さんに出させてもらいたいのね？ いいわよ、分かった……それじゃあ、こっちの……このショーツを使って、今すぐ楽にしてあげるから」

「一昨日のだから、もうオマンコの沁みは乾いちゃってるけど、どうかしら？ 信吾はこういうショーツも好きなんじゃなあい？ 生地もツルツルで、スベスベで、凄おく手触りがいいでしょう？ 真っ白だから沁みも目立つし」

「うん、なあに？ ショーツじゃなくて、パンティ？ ふうん、パンティって言ってもらいたいんだ？ パンティのほうがエッチに聞こえるのね？ ええ、もちろんいいわよ。それじゃあ、このパンティで……ツルツルの、パンティで、変態のオチンチンを包んであげましょうね」

「これにもたっぷり沁みがついていて、オマンコの形がよく分かるでしょう？ この、一番汚れたところ……膣の入り口を、こうやって、オチンチンの先っぽに押しつけて……んふふ……ラビアの沁みで亀頭をくるんで……根元まで全部、パンティで包んであげるから……あああん、どう？ 気持ちいい？」

「お母さんのパンティよ、沁みつキパンティ……ムレムレで臭あくなッたパンティ、パンティ、パンティ……おまんこパンティ、エロ沁みパンティ、まんこ臭パンティ、パンティ、パンティ……パンティおまんこ、パンティおまんこ、パンティまんこ、まんこ、まんこ」

「ほーら、ほーら、こうやって、指の輪っかで亀頭を締め付けながら、上下にゆっくりと……んふふ、いい感じ？ 我慢できなくなったら、いつ出してもいいのよ」

「ねえ、ねえっ、お母さんの顔を見てっ！ お母さんの目をっ、じっと見つめながら、ほらっ、ほらっ、ほらほらほらっ！ 信吾は今っ、大好きなお母さんにっ、手コキをされているんだって、この現実を噛みしめながらっ、ほらっ、ほらっ、ほらほらほらっ！」

「はっ、はっ、はっ、はっ、んっ、んっ、んっ、んっ」

「んんう、もう、信吾は本当にいやらしい子ねっ……オマンコの匂いで……お母さんの、オマンコの匂いを嗅いでこんなに興奮しちゃうなんて……ああん、出るっ!? 出そう!? ん？ ん？ 出そうなのね？ 出ちゃう出ちゃう出ちゃう、ああん、ほらほらほらほらっ、出して、出して、お母さんのパンティに……パンティの、オマンコの沁みにぶっかけてっ！ 出して、出してっ、出してっ！ お母さんのパンティに、パンティのオマンコに、信吾のミルクを出すのっ！ 赤ちゃん汁を、中出ししてちょうだいっ！」

「ほらっ、ほらほらほらほらっ！ 出してっ！ 出しなさいっ！ あああん、出るっ、出るわ、出るうう……出ちゃうね？ 出ちゃうね？ 出ちゃう出ちゃう出ちゃうう！」

（ひっ!? あああ、これっ……す、っごい……凄い、凄い凄いっ！ 若い男の子ってこんなに出すのね!? うわあっ、オシッコみたいな勢いで、こんなにいっぱい！）

「え？ え？ やだっ、凄いっ！ まだ出るの!? いいわよ、出して、出してっ！ 白い膿を全部出し切ってしまいなさいっ！」

「はあ……はあ……ふうう……はああ……」

【第4章】

「んふふ、いっぱい出たわねえ。お母さんのパンティが信吾の精子でドロドロよ」

「ほおら、見て。信吾の濃いザーメンで、オマンコの黄色い沁みが真っ白に塗りつぶされてるわ」

「でも、なあに？ まだ満足できないんだ？ フフフ、そうみたいねえ、分かってる。オチンチンはまだ大きいまま、少しも小さくなっていないものね」

「いいわ、だったら今度は、お口で気持ちよくしてあげる……ええ、そうよ。フェラチオで……我慢できなくなったら、そのままお口に出してしまってもいいのよ。お母さん、信吾の精子をぜんぶ呑んであげるから」

「うん？ それよりも、なあに？ シックス……ナイン？ んもう、本当にエッチな子……でも、いいわよ、信吾がしたいならシックスナインで、オチンチンをしゃぶってあげる」

（この子ったら、ますます大胆になってきてるわね。きっと理解してるんだわ。今のお母さんならエッチなことを何でも叶えてくれるって。もう遠慮なんかする必要もないんだって）

「じゃあ、こうやって、膝をついて、信吾のお顔をまたいで……フフフ、なあに？ 変な声を出しちゃって……ん？ 凄くエッチ？ レオタードが股に食い込んで、もう少しでオマンコが見えちゃいそうですって？」

「しょうがないでしょう、お姉ちゃんのレオタードを無理やり着てるんだから、きつくて股に……オマンコの割れ目に、食い込んできちゃうの」

「それだけじゃなくて、何？ グチヨグチヨ？ レオタードまでグチヨグチヨになるほどオマンコが濡れてる？」

「うん、そうね、分かってる……だって、お母さんも凄くエッチな気分になっているんですもの」

「いいのよ、見ても。お母さんのオマンコを……興味があるんでしょう？ 信吾は、お母さんのオマンコが見たくてたまらなかったんじゃない？ いつもいつも想像していたのよねえ？ ショーツの沁みを見ながら、お母さんのオマンコはどんな形をしているのかって」

「さあ、遠慮なんかしないでいいから、レオタードを横にずらして本物を見てごらんなさい。こんなこと今日しかできないんだから、ね？ オマンコの形を隅々までしっかり瞳に焼きつけて」

（あああ、私ったら、こんなことを……義理とはいえ、息子に一番恥ずかしい女の部分を……オマンコを見せつけるなんてっ……すごく濡れてるのに、ああん、汚れてるのにっ……でもっ、でもっ、今さらよ、今さらだわ。私も見られたい。信吾に見てもらいたいっ、エッチなオマンコを、発情して濡れてるオマンコをっ、隅々まで視姦されたいのっ！）

（ああ、レオタードの股がずらされていく。割れ目に食い込んでいた布が、横に……あっ、あっ、ああん、ラビアがはみ出してきて……んんう、トロトロの割れ目も、全部っ……もう、丸見えよ、オマンコが全部っ丸見えだわっ！）

「も、もう、信吾ったら……そ、そんなに、興奮する？ ええ、そうよ、そのビラビラのお肉が小陰唇、ラビアよ……ヤダ、もう、そんなに割れ目を広げて……うん、いいわよ、いいから……ええ、その穴が膣口、オチンチンを入れるところよ」

「ひっ！ やっ、あっ、ダメえ……そんなにしたらダメよ。そこは敏感だから……そうよ、オマンコの中で一番感じる場所。クリトリスよ。信吾も知ってるでしょう？」

「え？ 大きい？ お母さんのクリトリスが？ そうかしら？ 分からないけど……でも、信吾だって分からないんじゃない？ お母さんのクリトリスが大きいかな小さいかなんて……で、でも、確かに、今は大きくなってわ。パンパンに充血してて、割れ目から飛び出しちゃうくらい大きく膨れてる」

「そうね、男の子と一緒に……勃起、してるわ。お母さんのクリトリスはオチンチンに負けないくらい硬く勃起してるのよ」

「あっ、そこは……ちよっ、ちよっとダメえ、そこはお尻の穴よ……んもう、そんなところまで興味を持たないの」

「え？ ここでもセックスを？ そ、それは……ええ、そうね、肛門性交。アナルセックスっていうけど、でも、そういうことをするのは、ほんの一部の人だけよ。信吾がどこで知ったのか知らないけど、アダルトビデオでされてるようなことが普通だと思ったらダメ……もちろんじゃない。お母さんだってアナルセックスなんてしたことないわ」

「はいはい、もうお尻の話は終わり、ね？ 信吾が興味があるのはオマンコでしょう？ オマンコの匂いも知りたかったのよね？ いいのよ、嗅いでも……ショーツの沁みをクンクンしたみたいに、本物の匂いを……ムレムレの、オマンコの匂いをいっぱい嗅いでごらんなさい」

（ああ、嗅いでるっ、嗅がれてるっ！ 息子にオマンコの匂いが……洗ってないのにつ、ムレムレで、臭あくなっているのに……しかも、グチュグチュなのよ。愛液で中もトロトロで、発情してるオマンコっ、発情マンコの匂いがっ、ああああ、息子に嗅がれてるうう！）

「はあ、はあ、はあ……ど、どう？ 凄い？ んふふ、凄く興奮しちゃう？ そうよねえ、好きだったものねえ、蒸れて臭あくなったオマンコの匂いが」

「えっ、何っ!? 我慢できないって、何を……はうっ！ あっ、あっ……な、舐めるの？ 舐めたいのね？ いいわよ、いっぱい舐めなさ、ひっ、ひいい！ あっ、あっ」

「んっ、んっ、んんう……んもう信吾ったら、そんなにエッチな舐め方していけない子お……あはあん、もう、お、お母さんも舐めるわよ、信吾のオチンチンを舐めて……いっぱい、いっぱいフェラチオしてあげるから……んぢゅうう……んっ、んんう……んぼっ、むぼっ！」

「ん？ んっんっんっ……んんーっ!? ん……んっ……んんう……ふう……ゴックン」

「んっ……じゅるる……んんう……ふううう、はあぁ……またいっぱい出たわねえ。二回目なのに凄く濃くて……で、どうだった？ 初めてのフェラチオは？」

「こんなに気持ち良かったのは初めて？ お母さんにしてもらうなんて夢みたい？ フフフ、だったらよかった。そんなに喜んでくれてお母さんも嬉しいわ」

（でも、信吾はまだ満足していないみたいね。オチンチンがまだこんなに硬くて、少しも小さくなっていない。むしろ射精するたびに大きくなってるとような気がするわ。若い男の子ってみんな、こんなに精力をもてあましているのかしら？ それとも信吾が特別？ もしかしたら絶倫だったりして……うん、むしろ、この程度で満足されても困るわ。ここで終わってしまったら、私のほうが生殺しですもの）

「でも、どうしたのかしら？ 二度も出したのにオチンチンはまだ硬いまんま」

「だって、なあに？ お母さんだから？ フフフ、お母さんとなら何度だって射精できますって？ 本当に？ でも、確かに、そうかもしれないわね。お母さんと二人きりで暮らしながら、信吾はずっとずっとエッチな妄想をしていたんだから……いつもいつもお母さんをオナニーのオカズに……オナペットにして、何度も何度もオチンチンをしごいていたんですもの。まだまだしたいこと、してもらいたいことがいっぱいあるはずよねえ？」

「いいのよ、恥ずかしがらないで教えて……信吾はいったいどんな妄想をしていたの？ 妄想の中で、お母さんとどんなエッチなことをしていたの？」

「あっ、やああん……そ、そうやって、オマンコを弄ったの？ 指を、二本？ オマンコの穴に突っ込んで……あっ、あっ、ちょっと、激しっ……んんう……そんなに乱暴にしたらっ……おっ、おほおうっ！ あああん、そこ駄目え、ダメよお、そこほじったら、おほおん……そんなに深く入れたら……おっ、おっ、奥っ、当たるっ……あっ、あっ、あっ、ホントにやめてえ、そんなにされたらお母さん、我慢できなくなっちゃう」

「だったら？ だったらしようって、何を？ まさか、セックス？ でも……でもそんな」

（ああっ、遂によ、遂に来たわ、このときが……ちょっと性急すぎるかもしれないけど、でも、このチャンスを逃したら、もしかしたら二度と……そうよ、せっかく信吾もやる気になっているんだから今よっ！ 今しかないっ！）

「あっ、あっ……あああん、またそんな……ちょっとダメ、ダメだったらぁ……分かった、分かったからやめて……とにかく指を抜いて、ね？ お願いだから」

「はあ、はあ、はあ、ふうう……あのね、いい？ 本当はいけないことなのよ。それだけは分かって……ううん、義理でもダメなの。血が繋がってなくても許されないことなの。でもね、でも……そうよね。信吾の言うとおりに、もう今さらかもしれない」

【第5章】

「さあ、信吾、ここに寝て……大丈夫よ、信吾は何もしなくてもいいから、ね？ お母さんに全部任せて」

「じゃあ、レオタード脱ぐわね……え？ レオタードは脱がないで？ でも、セックスを……ああ、そうか。お母さんにレオタードを着せたままでセックスしたいのね？」

「ううん、全然おかしくないわ。そういう趣味の男性もいっぱいいるもの。裸より着衣姿のほうが興奮する男性が……フフフ、そんなにレオタードが気に入ったんだ？ 分かったわ、それじゃあ着たままで。股を脇にずらせば入れられると思うから」

「こうやって、大きく横に……んっ、これでいいわね。これなら入るところがよく見えるでしょう？ いい？ 見てて。信吾のオチンチンが、お母さんのオマンコに入るところを」

「ほおら、いくわよ。ゆっくりと腰を下ろして……あっ、あああ、当たってるのが分かる？ お母さんのオマンコの穴に亀頭が……さあ、もっと……ん、んう……あっ、あっ、あっ……カリまで、嵌まった」

「このまま一気に奥まで入れるわよ、いい？ 信吾のオチンチンを全部、お母さんの中に……んっ、んんっ……おおおうっ！」

「はあ、はあ……んふふ、入っちゃった……見える？ 信吾のオチンチンが根元まで、お母さんのオマンコに入っているわよ……あああ、凄い、信吾のおっきいから、すごく奥まで来てる……あっ、あっ、あっ、あああん、一番奥まで届いてるわ」

「ほらっ、ほらっ、どう？ 信吾も気持ちいい？ はっ、はっ、はっ、んっ、んっ、んんう、お母さんの中、どう？ どう？ お母さんのオマンコどうなの、ん？ ん？ あっ、あっ、あっ、あっ」

「ほら、ほらほらっ、もっとよ、もっと……もっともっと気持ちよくしてあげるからあ……んっ、んっ、んっ、締まるでしょう？ ねえ、オマンコ締まって、気持ちいいねえ？ ほらほらほらっ、もっと早く動いてあげるっ！ んっんっんっんっんっんっ！」

「あっ！ んひっ、ひっ！ おおおうう……そっ、そっ！ いいわ、信吾、おっ、おっ、おっ、ほおう！ はっはっはっ、んっんっんっんっ！」

「あっ、あっ、あっ、も、もうダメ？ ん？ もう出ちゃいそう？ いいわよ、出して……このまま中にっ、んんう！ お母さんの、オマンコの中に出してっ、あああ、中出ししてっ、奥に注いでえええ……お母さんも、イツ、クッ……イクから、一緒よ、一緒にいこう」

「おほおお！ おおお、イ、ク……イクイクッ……んあああ、いいいいくっ、イクイクイクッ、いぐうう、イグイグう、んおおおお！」

「はあはあはあ、はああ、ふうう……はああ……ふうう……」

「ひっ!? ひいっ! ちょっと、ちょっと待って、何? 今度は僕が上? そんな……ちょっと待って、待っててば、ああん、お母さんまだ、イッてる、まだイッてるから」

「え!? え!? ええっ?? あっ、あっ、いやああ、こんな体位でっ!? これ……マングリ、返しね? うんっ、見えるっ、見えてるっ、信吾のオチンチンが真上から、お母さんのオマンコにズボズボ突き刺さってくるっ、んんーっ!」

「あっ、あっ、これ、すっ、ごい……凄いっ! 凄い凄い凄いっ、いいい! おおおお、深い、深すぎるっ、うっ、くうう、当たるっ、ゴリゴリ当たるっ! 子宮にっ、ポルチオにっ! そこダメ、ダメダメッ、子宮の入り口は弱い、弱いから……ああ、またイクッ、イッちゃうイッちゃううう……んおおお、気持ちいい気持ちいい、きもちいいいい!」

「おっおっおっ、もっとよ、もっと奥まで叩き込んで、お母さんをイカせてえ……もっとゴンゴンしてっ、ポルチオを叩いて、挟って……子宮の中に入るくらい深く押し込んで、ガンガン突いてっ突いてっ! そうっそうっ、そおおお! いいいいいっ、上手いは信吾っ、上手いっ!」

「ひっ、ひっ、ひいっ! やだっ、入るっ! 入るっ! ああああ、ダメダメダメえ、本当に、子宮に入っちゃううう! あああ、分かる、分かるのっ、子宮口が緩んできて……入るのっ、入ってくるのっ、信吾のオチンチンがっ、亀頭がっ、メリメリ入ってくるう!」

「んおおお、凄い凄い凄いい! 子宮の入り口が裂けちゃうう、ポルチオが、ああん、ダメになっちゃうう、んほおおお……子宮っ、子宮がっ、ああ、子宮が壊れちゃうっ、いいいいやあああ、気持ちいい気持ちいい気持ちいいのお!」

「おっ、おっ、おっ、おっ、おおお、激しいっ激しいっ! イクッ、イクイクイク、イグウ、イグウ、ほおおお、おおお……ひっ、ひっ、ひっ、またイッ、クッ、クッ、クッ、うううう、もうダメ、もうダメ、オマンコ壊れるっ、子宮が裂けちゃうううう……ああああ、イグーッイグーッ! 止まんない止まんないっ! ああああ……ひいいい……イッ……クッ……おおお、あああ……もっと壊してっ、もっとおおお、子宮を裂いてっ、オマンコ壊してっ! 子宮を壊してえええ、オマンコぶち壊してえええっ!」

【エピローグ】

「こうして私は、母親にあるまじき罪を犯してしまいました」

「今さら言い訳するつもりはありませんが、すべての発端は夫に浮気にあると思っています。息子の性欲に当てつけられた、そんな一面もあるのでしょうか。お恥ずかしい話、あのころの私は女盛りの肉体を持て余し、男を強く欲してもいましたから」

「だからといって、一時の気の迷いで済ませるつもりはありません。これからも信吾とはしっかりと向き合っていくつもりです」

「もちろん幸せな将来が期待できるわけありません。これからの生活を考えれば、不安ばかりが心にこみあげてきます。もしこの先、信吾との関係が破綻したら……もしも信吾の将来に悪影響を及ぼすようなことにでもなったなら……」

「ですが、たとえどのような事態になろうとも、私が夫と別れさえすれば、血の繋がりが無い信吾との関係も清算できるはず……所詮、紙切れ一枚の関係だと、それほど軽く考えてはいませんが、私にとっては『離婚』という二文字が免罪符になっているのも事実なのです」

「身勝手なことは承知しています。いまだ多感な時期にある息子の心に大きな傷を残してしまう恐れもありますが、だからこそ、そのときまでは……今の生活がつづけられる限りは、信吾の願いを何でも叶えてあげる、そう心に誓っているのです」

「それがたとえ、どのようなことであっても、どれほど変態的なことであろうとも」

「信吾の望みを叶えてあげればきっと、私にも見返りがあるでしょうから」

F I N